

9. 走出における神社祭礼と継承

須佐 千絵莉

- | | |
|---------|-----------|
| 1. はじめに | 4. ごうらい祭り |
| 2. 概要 | 5. 考察 |
| 3. 万歳楽土 | 6. おわりに |

1. はじめに

今回聞き取り調査を行った門前町の中でも、門前町走出区に焦点を当て、その氏神である櫛比神社で行われる神社祭礼について調査した。走出には1年に8つの祭礼が存在し、区長や氏子総代を中心に運営され継承されてきた。春季祭で行われる「万歳楽土」は県指定無形文化財に登録されている。また夏祭り、通称「ごうらい祭り」は町の中を静かに行進することから「葬式祭り」とも呼ばれ、隣の門前区と合同で行われるが、櫛比神社が總持寺祖院へ立ち寄るという「神仏混合」がみられる全国でも珍しい行事である。しかし、走出の神社祭礼について住民の方々からお話をお伺いして調査する中で、その現状と課題点がみられた。そこで以下では、神社祭礼について課題点も挙げながら走出の神社祭礼についての調査内容をまとめていく。

2. 櫛比神社と神社祭礼

2.1 櫛比神社の由緒

櫛比神社は延喜式神名帳で「諸岡比古神社 能登国羽咋郡鎮座」と記されており、現社名で「櫛比神社」となっている。

『新修 門前町史』(2003: 164)によると、櫛比神社は、かつて、十二権現、十二所社、少名彦社ともいい、大名牟持神・少彦名神を祀る。少彦名神は、平安時代における天台の主仏・薬師如来を本地とし、大名牟持神・少彦名神の組み合わせは、気多大社と金丸宿那(すくな)彦神像石(かたいし)神社の神が力を合わせて能登を平定した故事に基づく平国祭の両神と同じである。このような神々を祀る櫛比神社は、国土平定、豊穰を司り、農の予祝の中心に相応しい神社だといえる。

また櫛比神社は門前区の氏神でもあるため、社を修復する際などの費用は走出区と門前区で折半して出資している。



写真1 櫛比神社 境内入り口の鳥居
(2018年8月19日 筆者撮影)



写真2 櫛比神社由緒書
(2018年8月19日 筆者撮影)

2.2 走出の神社祭礼

走出で行われる神社祭礼は1年に8つあり、1月1日の元旦祭からはじまる。元旦祭では早朝6時に氏子全員で参拝年始を祝している。

春季祭が2月11日、12日に行われ、「お当祭り」とも呼ばれる。11日、お当宅に神社の分霊であるオハケを奉斎して祭事を行う。12日、神社にオハケを奉斎した後、「万歳楽土」の舞を奉斎するが、この日は獅子舞も出る。かつては幟旗を立てて祝したが、近年ではみられない。

ごうらい祭りは7月18日、19日に、秋季祭は11月11日、12日に催される。かつての秋季祭では幟旗を立て獅子舞が出ていたが、現在では省略されている。祭事後、当の用意した肴で簡単な直会を行って終了する。

その他の神社祭礼としては、4月第2土曜日の鎮火祭で神事が行われ、11月23日の感謝祭と12月31日の大祓いでは氏子総代が参詣する(『門前町の祭り』2004)。

H1さん(走出、女性、40歳代)によりと、男性は主に夏季大祭の御輿で活躍し、女性は春季大祭や秋季大祭の際、祭事後に振る舞う料理を作る。

表 1 走出の神社祭礼

月 日	祭典名	時刻	備考	服装
1 月 1 日	元旦祭	午前 6 時 30 分	区長、総代参拝	礼服
2 月 11、12 日	春季大祭 ・ 宵祭 ・ 例大祭	午後 6 時頃 午前 11 時	区長のみ参拝	羽織袴
4 月第 2 土曜日	鎮火祭（旧暦の 3 月 12 日近い休日）			平服
6 月 30 日	大祓い	午後 5 時	区長、総代参拝	平服
7 月 18、19 日	夏季例大祭 ・ 御輿渡御 ・ 例大祭 ・ 仮宮夜祭 ・ 日中祭	午前 11 時 午後 9 時 30 分 午前 11 時	区長、総代参拝 区長、総代参拝 区長、総代参拝	袴 羽織袴 同上 同上
11 月 11、12 日	秋季大祭 ・ 宵祭 ・ 例大祭	午後 6 時頃 午前 11 時	区長参拝	礼服
11 月 23 日	感謝祭	午後 5 時	区長、総代参拝	平服
12 月 31 日	大祓い	午後 4 時	区長、総代参拝	平服

(出所：櫛比神社年間祭典案内・走出・を参考に作成)

3. 万歳楽土

櫛比神社境内の案内板によると、万歳楽土は室町時代より伝承されており、鬼屋神明社の「ぞんべら祭り」と一連の行事である。年の初めに当たり五穀豊穡や家内安全の強い願いを込めた農民の素朴な祭りであり特殊な田楽形式が継承されている。また走出区で作成された「櫛比神社年間祭典案内」には、「能登の田遊び考—ぞんべら祭りとマンザイロクト—」によると鎌倉時代から室町時代に都から猿楽（音楽や歌舞伎によって滑稽なものまねや曲芸をしたもの）や田楽の法師等によってもたらされたものといわれる、と記されている。

『新修 門前町史』には、2 月 11、12 日にかけて櫛比神社および当元宅で行われる予祝、ならびに当渡しの行事、と記されている。11 日、走出、門前の親お当、子お当二人のそれぞれ 3 人は、獅子舞の迎えを受け、櫛比神社で宮司からオハケ（幣束）を受け取り、各家で奉斎する。子お当宅から宵祭りをを行い、親お当宅で直会がある。12 日は本祭りで、宮司が各お当宅を回って神事を行い、神社では直会、引き続き獅子舞の奉納がある。獅子舞が走出の親お当宅へオハケと当元を迎えに行く。途中で門前のオハケも合流し、走出の親お当によるマンザロクトの奉納となる。袈姿の舞人は右手に祝い棒（五段の削り花）、左手に雄松を持ち、マンザイロクトと唱え、右上に松、左上に祝い棒を振り上げる。太鼓、参列

者もマンザイロクトと大声で囃し、詞章の区切りに太鼓が打ち鳴らされる。

祝い棒は稲が花のように実った形をしており、このように稲が実ってほしいという願いが込められている。舞人が祝い棒をもって、左右にフラフラと舞うのは、詞章にあるように持てないほどに実りの豊かさを表現し、太鼓は雷の擬音で水の心配のないことを表現している（『新修 門前町史』2003：163-164）。また舞人に関して、10 年程前までは厄年の人が舞っていたそう。以下は万歳楽土の際に舞人が唱える詞章である。

資料1 万歳楽土 舞人詞章

マイザイロクト、マンザイロクト、

ついと起って申する様は、嵐瀬の、稲なんぞ、おおきに太りて、葉もちがようて、白髭が、かいなずいて、実入りがようて、あっちもふらふら、こっちもふらふら、一束に一斗八升

続いて、申するようは、浦のかくちの、人参なんぞ、牛蒡なんぞ、おおきに、太りて、葉もちがようて、ねいって

続いて、申するようは、下司が原の、大麦なんぞ、小麦なんぞ、おおきに、太りて、実入りがようて、あっちもふらふら、こっちもふらふら

続いて、申するようは、恵比須山の、大豆なんぞ、小豆なんぞ、おおきに、太りて、実入りがようて、あっちもしやしやら、こっちもしやしやら

続いて、申するようは、岩木山の、栗穂なんぞ、稗穂なんぞ、おおきに、太りて、実入りがようて、あっちもふらふら、こっちもふらふら

続いて、申するようは、二十四の、作りなんぞ、村おも、所も、年寄衆も、若い衆も、子供衆も、ご繁昌で、ご繁昌で、ご繁昌で、まんざいろくとう、まんざいろくとう、まんざいろくとう

（出所：走出区長より頂いた案内を参考に作成）

4. ごうらい祭り

4.1 ごうらい祭りの概要

「ごうらい祭り」は7月18日、19日に門前地区と合同で行われる。神輿と共に旗・獅子舞・氏子供人・楽人（笛、鼓）などの一行が巡行し、鬼面をつけ棍棒を持った「ごうらい」と、獅子「がちゃ」が巡行列を先払いする。この「ごうらい」が「ごうらい祭り」の由来である。

またごうらい祭りの最も特徴的な点は、神輿が總持寺祖院に入り祭典を行うという神仏混合がみられることである。かつて櫛比神社の神様が總持寺の守護神であったことから、年に1度總持寺の仏様のご機嫌を伺いにいったことが由縁で、現在のような祭礼となっている。境内に神輿が入ると僧侶がそれを出迎え、宮司が祝詞を奏上する。

4.2 ごうらい祭りにおける役割

ごうらい祭りの準備や世話に関する役割は以下のとおりである。

まず、祭りを中心に運営するのが氏子総代である。Mさん（走出、男性、70歳代）によると、氏子総代は3名で担当し基本的に任期は3年であるが、継承者がおらず任期は3年以上になることがほとんどだという。主な仕事は、祭り・準備の運営やお当の決定、御輿などの役割分担である。氏子総代に任命されると、石川県神社庁から登録証が贈られる（写真4）。

ごうらい祭りのお当は、走出は3軒、門前は1、2軒が担当し、お当が祭りの費用の不足分を持つ。主にお当は、祭事のお供え物を準備したり、春季祭の際にオハケを奉斎したりする。

巡行する際の役割には、御輿・子ども御輿・獅子舞・天狗・ごうらい・がちゃがある。H2さん（走出、男性、50歳代）によると、御輿には14名が必要で実際に担ぐのは8名だが、15年程前から人手不足のために御輿を担ぐことができず押して巡行しているという。また御輿を担ぐ人は走出から、御輿のほかに笛や太鼓の演奏をする人は門前から選出して担当している。I1さん（走出、男性、60歳代）とKさん（走出、男性、60歳代）によると、かつては役割のない人々が巡行列の後ろに付いて一緒に練り歩いていたが、最近ではそのような光景も見られなくなった。

子ども御輿についてH1さんは、子ども御輿は女兒が担当し12、13名程度必要であるが、現在の子ども会は全員で8名と人手不足のため、東小学校の他の地区の子どもたちにも声をかけて集まってもらっているという。そもそも子ども御輿の始まりはUさん（走出、男性、80歳代）が走出に子ども御輿を寄付したことであるそうだ（I1さん、Kさん）。

対し獅子舞と天狗は男児が担当し、獅子舞は4名、天狗は1名が行うが、ごうらい祭りでは各家を回るため体力を考慮して、獅子に入る子どもたちは交代しながら行う。そのため獅子舞・天狗をするには5名以上の男児が必要になり、子ども神同様、他に地区の子どもたちに応援してもらって行っている。走出の獅子舞はかつて一度廃れた過去があるが、その後に安代原から獅子舞を習って再興した（I1さん、Kさん）。また獅子舞は約1か月前から宮で練習を始めるという（H2さん）。

獅子舞は現在門前町108集落のうち22地区で行われている¹。まず獅子の名称には大獅子や黒獅子などがあるが、走出は「獅子」という名称になっている。次に、獅子の構成について、獅子頭は各地区の多くは1組の獅子頭で神社が保管しており、走出も同様である。獅子舞の際、獅子頭をもって振るものを「頭振り」と呼ぶ。また獅子の胴体については、走出では獅子の胴体を「カヤ」と称しており、走出のカヤは本麻製で巻毛模様である。次に獅子に対する演舞者についてみる。獅子に演奏をなすものを、走出では特に「天狗」時には「棒振り」と称する。組み立ては青年団「走龍会」団長宅で行われ、組み立て後は

¹ 以下では『石川県の獅子舞』の「門前町の獅子舞」を参考に走出の獅子舞についてまとめる。

神社へ行き修祓を受け、神輿の先導をして、村回りをし、最後に入り宮で獅子殺しが行われる。このように獅子舞は、神輿の先導役、五穀豊穡を祈るものとして行われ、青年団の所役ともなっているが、祭りの余興・娯楽との考え方も強くなってきている。

ハヤシで用いられる笛や太鼓なども、頭振りや天狗と同様、技能があれば誰でもできるが、後継者不足が問題である。門前町全体で見ても現行の獅子舞は海岸より内陸山地側に多く、これは廃絶地区の多いことも意味する。世帯数の少ない中で継続の困難も聞かれ、廃絶地区では復活を願いながらも、そのまま地区住民から忘れられているのが現状である。走出のような現行地区も、熱意は強いが踊り手の不足が問題となっている（『石川県の獅子舞』1986：423-429）。

さらに「ごうらい」は1名、「がちゃ」は2名が行い、獅子舞と同様に神輿の先導、または警護役を行う。「ごうらい」は手ぬぐいで頬かむりし、頭に毛冠と恐ろしい面をつけ、素肌に麻織り模様のない上衣、天狗袴風の股引をはき、素足に草鞋履きで、手に直径 5cm、長さ 180cm ぐらいの丸太棒を持つ。

「がちゃ」は色彩のはげたような平べったい獅子頭に本麻巻毛模様のカヤをつけたもので、上半身裸体で天狗袴に草鞋履きの 2 人が、カヤに入り獅子頭の口をガチャガチャさせる。

ごうらい、がちゃは祭礼が終わるまで、子どもたちを追いかけ、神輿渡御には前後周囲を走り回り、神主が祝詞を唱える時は、人々を座らせる役割を持ち、獅子舞と別行動することが多い（『石川県の獅子舞』1986：428）。



写真3 ごうらいの面 大癒見（おおべしみ）
（2018年8月20日 筆者撮影）



写真4 氏子総代の登録証
（2018年8月19日 筆者撮影）

4.3 ごうらい祭りの過程

御輿渡御は夕方、静かな太鼓の音とともに始まり、まず宮でお祓いを受けてから獅子舞

が奉納された後、地区内を巡行する。袴姿の男性陣による笛の囃子に合わせて行進し、18日は荒瀬、堅町、總持寺祖院を回る。途中の休憩所ではお供え物を並べて祝詞があげられ、獅子舞が舞う。巡行列の通りの家々では、玄関先にお神酒と赤飯を供え飾られている。その頃、總持寺祖院では三門の奥で住職が並び巡行列を待つ。巡行列は太鼓橋を渡り境内に入ると、神事を行い獅子舞を奉納する。總持寺祖院の僧侶達は貫主とともに並んでこれを見守っている。H2さんによると、現在は總持寺祖院が工事中のために山門の手前で祝詞が挙げられるという。總持寺祖院境内での神事後、お仮屋まで行き御輿はここで1泊する。19日は、堅町、新保先を巡行し宮に入り御輿渡御が終了する。巡行列が通過のする経路については以下の図1、2で示してある。

H1さんによると、巡行中の休憩は祝詞をあげる大きな休憩が2か所、給水などのための休憩が数回あるが、どちらの休憩でも獅子舞が舞う。また御輿には、子ども御輿、門前の御輿、走出の御輿の3つがあり、子ども御輿が大人の御輿に追い越されてはいけないという習わしがある。

また、I2さん（走出、男性、60歳代）によると、祭りで振る舞われる料理として一般的なのは、きゅうりの酢の物や生きたドジョウを入れて煮込んだそうめんである。かつてはドジョウを捕まえるための班もあったそうだが、現在ではスーパーで購入するのが普通である。ドジョウの代わりにイモリが入っている時もあったそうだ。



写真5 ごうらい祭りの1日目に神輿が一泊するお仮屋（2018年8月21日 筆者撮影）

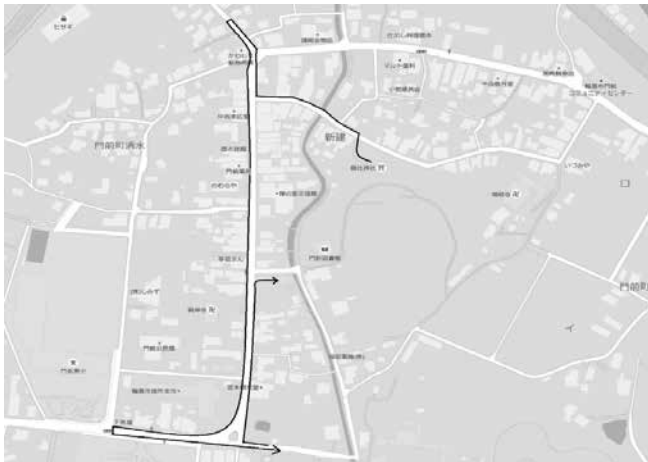


図1 ごうらい祭り御輿ルート 1日目 (出所：聞き取りより作成、Google マップ)

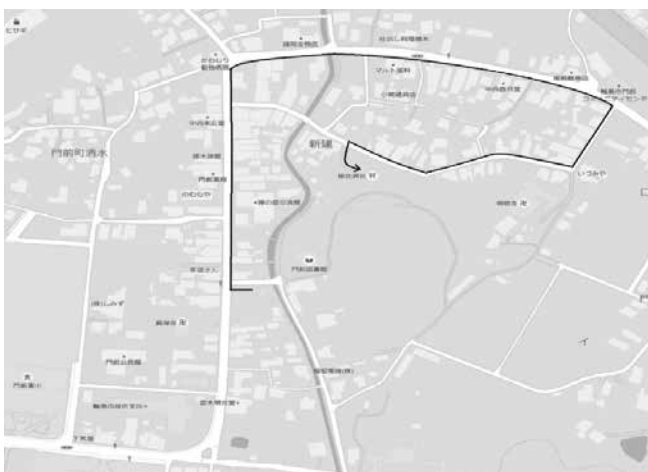


図2 ごうらい祭り御輿ルート 2日目 (出所：聞き取りより作成、Google マップ)

4.4 ごうらい祭りにおける課題

ごうらい祭りを中心に調査する中で人手不足という問題点がみえてきた。最近では祭りに参加する人も見る人も減少しているという。H1 さんによると、特に子どもの数が著しく少なく、他の地域の子どもたちにも参加してもらわなければならないのが現状である。しかし少子高齢化が進行しているのは走出のみでなく、門前町全体として同様の状況がみられ、祭りの担い手が足りなくなってしまう可能性が高い。神社祭礼を含めた伝統を今後も継承していくためには解決しなければならない難しい課題である。

5. 考察

走出で行われている神社祭礼について、神社の由緒や祭礼の歴史・変遷を調べていくと

特有的のものがいくつか見られた。県指定無形文化財に指定されている万歳楽土は昔から伝わる五穀豊穡や家内安全を願う祭りで、舞人詞章の独特な音頭が風物となっている。

またごうらい祭りでかつての名残から櫛比神社の御輿が總持寺に立ち寄り、神が仏のご機嫌を伺いに行くという形式をとっていることもそのひとつであり、この祭りの最も特徴的な点である。他にも「がちや」や「ごうらい」が伝統的な衣装を身にまとい、御輿などの巡行列を先払いする形式も特有のものである。小学生から大人までそれぞれ伝承されてきた役割があり、かつてからは少々簡略化もみられるが、基本的な形は変わらずに受け継がれてきた。

しかし、走出の神社祭礼において深刻な人手不足という状況がみられ、住民からも継承への心配の声が多々聞かれた。地区内の人口では祭りの運営が厳しく、特に少子高齢化の影響で子どもの数が足りず他の地区から応援を要請して行っているのが現状である。このような状況の中でどのように神社祭礼を受け継いでいくかが大きな課題となっている。長い間受け継がれ大切にされてきた歴史を、この先の将来の代に伝承していくためには何が必要なのか慎重に吟味していく必要がある。

6. おわりに

今回の実習では門前町門前地区の方々にとたくさんお話を伺い、門前での生活の様子やかつての様子を知ることができました。多くの住民の方とお話をする機会があり、門前の人々のあたたかさを感じました。また神社祭礼について調べる中で走出に関する歴史について興味をもって調査することができました。実習を通して、自分の故郷とまったく遠い場所で似た文化やまったく違う文化を実際に知ることができて、文化や歴史についてもっと調べてみたいと感じました。最後に、今回私たち大学生をあたたく迎え入れ、多くの貴重なお話を聞かせてくださった住民の皆様に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。